

## ピエール・プレヴォの生涯と業績

中宮 光隆

はじめに

1. ピエール・プレヴォの少年・青年時代
2. 18世紀末のジュネーヴとピエール・プレヴォ
3. ピエール・プレヴォとジェイン・マーセット婦人

おわりに

### はじめに

筆者はすでに、シスモンディ経済学を「過少消費説」と特徴付けるのはきわめて一面的であり皮相な理解であること、彼の経済学にはいわば諸資本の過度な競争を抑制するための政府の介入と、需要を最大限拡大して経済の不均衡を回避するための分配の平等の必要性という重要なモメントがあることを指摘した<sup>1)</sup>。さらにそのような経済理論を構築するに至ったシスモンディ (Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842) の思想的背景の一端を、彼の周囲の人々を通じて瞥見した<sup>2)</sup>。前稿でも触れたように、スミス (Adam Smith) やリカードウ (David Ricardo) といった経済理論における継承や批判の流れと

は別に、その根底を流れる思想面で彼に影響を与えたと思われる人々をグループングしつつ列挙すれば、以下ようになる。まず第1にスタール夫人 (Anne Louise Germaine, Baronne de Staël-Holstein) のサロンの常連たち。コンスタン (Benjamin Constant) やシュレーゲル (August Wilhelm von Schlegel)、それにシャトーブリアン (Chateaubriand) 等。第2に『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たち。ピクテ兄弟 (Marc-Auguste Pictet, Charles Pictet (Pictet de Rochemont))、モーリス (Frédéric-Guillaume Maurice) 等。第3に、第2のグループとも関連するが、プレヴォ (Pierre Prévost)、デュガルト・ステュアート (Dugald Stewart)、マーセット (Marcet) 家の人々等。第4にデュモン (Etienne Dumont)、マッキントッシュ (Sir James Mackintosh) 等。第5にスミスやリカードウ、マルサス (Thomas Robert Malthus)、セー (Jean-Baptiste Say) 等である。

それらのうち本稿ではピエール・プレヴォに注目し、彼の生涯と業績を跡づけ、それとシスモンディとの接点を探ることが課題である。両者の関係としては、もとより思想内容が重要であり、論理の継承関係ないし対比が必要であるが、本稿ではその準備作業として、いずれもプレヴォが他界した1839年に発表された2編の追悼論文——カンドルとシェルビュリエのそれ<sup>3)</sup>——、およびパッペの論文<sup>4)</sup>を参考にしつつ彼の足跡を確認することに主眼を置き、プレヴォの論理・思想内容の検討は次稿に委ねることとする。

## 1. ピエール・プレヴォの少年・青年時代

ピエール・プレヴォ (Pierre Prévost, 1751-1839) は1751年3月3日ジュネーヴで、父のアブラハム・プレヴォ (Abraham Prévost) と母マリー・ベラミ (Marie Bellamy) の間に生まれた。父は、ピエールが生まれた当時、行政の要職に就いていたが、その直後にその街の牧師となり、後にカレッジの校長になった人である<sup>5)</sup>。ピエールの兄弟は兄のルネ・プレヴォ (René Prévost, 1749-1816) ひ

とりだった。ルネは弁護士や公証人といった法律関係の職業に就き、国務院の国家評定官（*Conseiller d'Etat*, 高等司法官代理）になった人である。ピエール自身は幼い頃聖職の身分を目指し、3歳半で神学を学んだものの、まもなくそれを断念して法律の勉強に向かったと伝えられる<sup>6)</sup>。

1764年に、彼は文学アカデミー（*Belles-Lettres*）の試験に合格して聴講生になった。ここでプレヴォは、決して厳しくはない管理の下で、好んで多くの作曲をしたりラテン語の詩を創ったりして余暇を楽しんだと、後に述懐している。若いプレヴォは音楽に情熱的に身を委ね、誰から指導されることもなく、音楽を修めたといわれる。4歳の時に家庭内の事故で左腕の障害がバイオリン演奏の妨げになったにもかかわらず、練習を積み重ね、慰みと楽しみの貴重な源泉を音楽に見いだしていた。音楽に対して強い興味を持つことによって、彼は、音楽が信仰に果たす役割、あるいはその可能性に関して熟考するようになり、この問題に関する命題を確立しようと、それを目標にするようになったという。しかし彼は、趣味ともいえる音楽のみにうつつを抜かすようなことは決してなかった。勉強・研究にも多大の関心を持って積極的に取り組んだ。彼は、「哲学の聴講は、まったく異なった分野の楽しみを私に得させた。私はドゥ・ソシュール（*De Saussure*）氏の非常に生き生きとして心地よい授業を思い出す」と書き残している<sup>7)</sup>。さらに彼は、正規の授業の他に、ル・サージュ（*Le Sage*）のもとで物理学を、そしてマレ（*P.H. Mallet*）のもとで天文学の授業を受けた。多領域の勉強にもかかわらず情熱を抱くプレヴォを、カンドルは「かれの考え方の並はずれた活動にとっての、また彼の主要な能力だった分析力にとっての栄養がそこにあったのである。彼は、彼の研究領域を拡張する機会を取り逃がすこともなかった」と指摘している<sup>8)</sup>。

1768年に哲学のコースを終えたプレヴォは、論理学のコースにはいった。それは、彼が関心をもっていたからではなく、彼の父と、母方の叔父のひとりサコネックス（*Sacconnex*）の牧師であるベラミー氏（*Bellamy*）の意図に従うた

めであったといわれる。彼はこの課題を、みずからの意志で自由に選んだと思われるぐらい非常にまじめに成し遂げた。彼の勉学に対する強い関心と、惜しみなく払われた努力を感じさせるものと言える。

1771年以降、弱冠20歳のプレヴォは、若い未婚の女性たちに対して宗教学の授業を行っていた。それは、彼の両親が彼に聖職に就くことを期待していたからでもあったようである<sup>9)</sup>。しかしプレヴォ自身は、次第に他の分野に興味を持つようになり、教会関係の職業につくことを断念したい気持ちが募ってきた。彼の友人オディエ (Odier) との間の文通にその葛藤が見られると、シェルビュリエが指摘している<sup>10)</sup>。シェルビュリエに依れば、プレヴォは1771年12月22日付けオディエ宛の手紙で、彼に職業の変更希望を伝えている。すでにこの年の10月には論理学の研究をやめ、法律学の研究にとりかかっていた。これ以降プレヴォはさまざまな職に就くことになるが、シェルビュリエは、プレヴォにとってそれが可能だったのは、彼の家庭が豊かでなかったことが逆にプレヴォの努力を刺激し、彼の能力を高め、しかもある特定の方向に彼を向かわせるという無理強いをしなくてすんだという、彼の家庭環境のおかげだと見ている<sup>11)</sup>。

1773年に彼は、弁護士の資格と法学博士の称号を取得した。法律学の研究を開始してからわずか1年半のことだった。同じ年に彼はオランダで教師の職を得たが、1年でそれを辞職した。1774年9月オランダからの帰途、彼はイギリスに立ち寄り、3ヶ月間をそこで過ごした。当時ロシアの駐ロンドン大使だったチェルニシェフ (Czernischew) 伯爵のもとで秘書の地位の申し出を受けたが、プレヴォはそれを断った。

その後、彼はバンジャマン・ドゥルセール (Benjamin Delessert) から息子たちの家庭教師になることを依頼され、それを引き受けることにして、ドゥルセールが住むリヨンに赴いた。ドゥルセールは若いプレヴォの知性を大いに評価したようである。その後も両者は永く交友を続けた<sup>12)</sup>。プレヴォがリヨンに着いたとき、ジュネーヴ・アカデミーにおける文芸の教授職が空席だと聞か

れた彼は、心が動いたものの、彼の友人と競争しないようにするために、プレヴォはそれを断念したという<sup>13)</sup>。ドゥレセール家は1774年にパリに移った。そのパリでプレヴォはルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）に会っており、それ後も、彼は何回もルソーと再会の機会を持った。プレヴォにとってルソーとの面会は大いなる喜びであったようである<sup>14)</sup>。パリ滞在中にプレヴォは、エウリピデス（Euripide）の翻訳に着手し、1778年に『オレステス』（Oreste）を出版した<sup>15)</sup>。シェルビュリエは、これらの翻訳は人々から高く評価され、プレヴォの確固たる名声を文学界に与えたと指摘している<sup>16)</sup>。

この数年間にプレヴォは、イギリス等からのいくつかの就任要請を断ったという。しかし、1780年にプロシャ国王フレデリック2世が彼に提示した2つの地位について、彼はこれを受け入れた。ベルリン科学アカデミーの会員と国王によって設立された青年貴族アカデミー（l'académie des jeunes gentilshommes）における哲学教授である<sup>17)</sup>。啓蒙的とみられるこの君主は、プレヴォがベルリンに到着したときからすぐに彼を評価する数多くの証言を認め、彼を積極的に認めていたという<sup>18)</sup>。この年の初めに2つの役職を任命されたプレヴォは、ベルリンにその後4年間滞在した。このアカデミーで彼は、初めに哲学のクラスに、後に道徳哲学のクラスに所属した。その間に彼はビットベ（Bitaubé）と親密な関係を築き、ギリシャ文学をさらに修める新たな動機となったし、メリアン（Mérian）はともに哲学研究の仲間だった。彼はまた、当時数学やまた新しい化学研究で著名だったラグランジュ（Lagrange）とも不断の交流があったし、そのほかにもペリソン（Perisson）や『美しきヴォルフ主義者』（la belle Wolfienne）の著者フォルメ（Formey）とも親しくするなど、当時の多くの著名人にも会っていたという<sup>19)</sup>。

交友関係だけではない。このアカデミーでプレヴォは、多くの多面的な論文に接することができた。彼が1780年9月14日に読んだ最初の論文のタイトルは、「道徳教育のために用いられる方法に関する考察」（*Observations sur les*

*méthodes employées pour enseigner la morale*) であって、この論文は、道徳は諸原理、感情、経験によって教えられるということを示した上で、なかでも経験が基盤になっていることを説いているという。シェルビュリエは、プレヴォは既知のことから未知のことまでつねに厳格に処理したいという欲望を持っていて、しかも知性は完全に知ることができ、そしてその結果、計算という厳密な方法を用いることができると考えていたと指摘している<sup>20)</sup>。またプレヴォは、1812年ウォーラストン (Wollaston) に宛てた手紙の中で、「たぶん私は、単純な考え方、とくに機械的な考え方に非常に愛着を持っているのだろう」述べている<sup>21)</sup>。このほかにもプレヴォは、1783年7月3日に「太陽系全体の重心の斬新的な動き」(*Mouvement progressif du centre de gravité de tout le système solaire*) に関する論文を、同年9月11日に「砲弾の速度の源」(*L'origine des vitesses projectiles*) に関する論文を読んでいるという<sup>22)</sup>。これらのことは、30歳代初めのプレヴォがベルリンのアカデミーで、自分が担当する哲学やあるいは道徳に関する論文だけではなく、自然科学にも興味を抱き、多分野の知見を積極的に取り込もうとしていたことを示すエピソードと言えるであろう。

さらにこの時期、プレヴォは、多くの小論を発表した。そのなかには自然科学分野のものもある。例えば、*Monatschrift de Biesler et Gedicke* 誌に気球に関する数編の論文を投稿している。また彼は、ベルリンのアカデミーに着任した際、政府の経済に関する小論を提出したと言われる<sup>23)</sup>。その後彼は、マルサス『人口論』の翻訳を行ったし、『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』(*Biblio-thèque Universelle*) やその他のジャーナルに経済学に関するさまざまな小論を発表した<sup>24)</sup>。

1784年にプレヴォは、危篤の父に会うために休暇を取ってジュネーヴに戻った。父は永眠したが、プレヴォはそのとき、ジュネーヴで新たに空席となっていた文芸教授職への就任を依頼された。彼は、そこで受け取る報酬がベルリンで受け取るその3分の1にすぎなかったとはいえ、自分の祖国で生活する幸

福感に抗しきれず、それを受諾してベルリンを去った<sup>25)</sup>。就任の際のセレモニーで、彼は、芸術の原理、とくに詩の原理に関する講演をラテン語で、またベルリン・アカデミーの思い出に関する講演をフランス語で行ったという。しかしプレヴォは、祖国ジュネーヴで要請された教授職に、ほんの短期間しか就いていなかった。

1785年に、クサク（Cussac）のギリシャ演劇の入手のためにパリに行くよう求められたプレヴォは、そこでの滞在を延長する必要があるとともに、同時に物理学と哲学の研究に全力を傾けたいという希望もあってジュネーヴ・アカデミーにおける文芸教授職を断念し、パリから辞表を送った<sup>26)</sup>。

翌年、ジュネーヴに戻ったプレヴォは、さまざまな研究に情熱的に没頭した。彼は、ジュネーヴ・ジャーナル（*Journal de Genève*）というタイトルの週刊誌や、科学やアカデミックな論文を集めた多くの雑誌に、多数の興味深い論文を発表した。彼はすでに1779年の初め頃から熱現象に興味を注いでいたが、その後も自然科学の分野の研究を続け、1788年には「磁力の源泉」（*l'Origine des forces magnétiques*）に関する著作（1 vol.）を出版するとともに、1791年には『物理学雑誌』（*Journal de Physique*）に「熱平衡論」（*Mémoire sur l'équilibre du feu*）を発表した。また、翌年彼は『熱の研究』（*Rechercher sur la chaleur*）を出版した。それは、彼の熱伝導論の萌芽を含んでいたという。このテーマはまた、彼を電流の組成にかかわる研究に導いた。ほぼ同じ頃、彼は、『物理学雑誌』に2編の「貿易風の限界について」（*sur la limite des vents alisés*）の論文を掲載した。これらは、物理学者間における彼の地歩を高めることに貢献したとキャンドルは評価している。さらに彼は、1790年8月21日付の『ジュネーヴ・ジャーナル』に公教育に関する論文を掲載している<sup>27)</sup>。このようにプレヴォの研究対象は社会科学、自然科学、それに教育等多岐にわたり、しかも次節でみるように彼の研究は、ジュネーヴの行政における公職を兼務しつつ、あるいはその後も長期にわたって遂行されたのであった。

## 2. 18世紀末のジュネーヴとピエール・プレヴォ

1786年の年末頃ジュネーヴに戻ったプレヴォは、200人委員会のメンバーに選ばれた。それまで無縁だった公的業務に彼は初めて携わることになるとともに、その後たびたび公職を務めることになった。この「200人委員会」とはいかなる組織であろうか。

ダランベールの『百科全書』中の「ジュネーヴ」の項目には、略述されたその歴史のなかに「200人委員会」に触れた箇所がある。「ジュネーヴの隣国であるサヴォワ [公国] の君主たちは、時には司教たちに支持されて、この年に彼らの権力を築くための努力を少しずつ、そして幾度も払っていたが、ジュネーヴは、フリブール (Fribourg) やベルン (Berne) との同盟に支えられて、勇敢にもそれに抵抗した。200人委員会 (le conseil des deux-cents) が設立されたのはそのとき、すなわち1526年頃であった。ルターやツウィングリの主張が紹介され始めていた。ベルンは彼らの主張を採用した。ジュネーヴもそれらを高く評価し、ついに1635年にそれらを受け入れた。教皇 (papauté) の位は廃止された<sup>28)</sup>。さらに同じ項目のなかに、ジュネーヴにおいて諸個人を分類する4つの階層 (①シトワイヤン (citoyens)、②ブルジョワ (bourgeois)、③アビタン (habitants)、④ナティフ (natifs)) が以下のように記述されている。「ジュネーヴでは諸個人を4つの階層に分類している。この都市 (la ville) で生まれたブルジョワの息子であるシトワイヤン。彼だけが司法官職 (magistrature) に達することができる。外国生まれのブルジョアやシトワイヤンの息子と、当局が与えることができるブルジョアの権利を獲得した外国人であるブルジョワ。彼らは議会 (conseil général) と200人委員会と呼ばれる高等会議 (grand-conseil) にも所属することができる。この都市にとどまることを当局から認められているが、他には何もない外国人であるアビタン。最後にアビタンの息子たちであるナティフ。彼らは父親よりもいくらか多くの権利を持っているが、しかし統



治からは排除されている」<sup>29)</sup>。とはいえ、河合清隆氏に依れば、この階層は大いに流動的で、「ブルジョワの家計の市内で生まれた2代目男子は、自動的にシトワイヤンに昇格する」し、「ナティブやアビタンは、原則として、市に承認され権利金を払えば、ブルジョワジー（誓約市民団）の一員となることができ」<sup>30)</sup>たという。

そして「18世紀初頭には、ナティブ・アビタンの数が人口の半分を占めるに到っていた。彼らは総会に出席できない、共和国の政治から排除された無権利者であった」<sup>31)</sup>。それにもかかわらず、18世紀中頃までは、この4つの階層間の対立はなかったようである。むしろ、富裕化してサヴォワ公から爵位と領地を買って貴族となった商人、家系のなかに貴族身分を持つ新教徒難民の一部、市参事会・200人委員会に属し官職貴族化した行政職歴任者などから、「17世紀にはシトワイヤンの身分のなかに実質的な都市貴族階層（パトリキア）が形成され、彼らが〔ジュネーヴ―筆者（以下同じ）〕共和国の支配階級として君臨した。そして、スイス諸都市の例に漏れず、ジュネーヴでも彼らが市参事会を独占し、《門閥寡頭制》が確立する」<sup>32)</sup>。このような「貴族」たちに対して闘争を挑んだシトワイヤンやブルジョワに、ナティブとアビタンは連帯していたという<sup>33)</sup>。ジュネーヴでは1760年代初めに国論を2分する混乱が生じたあと、一旦は妥協が成立したものの、1782年になって対立が再燃した。「ナティブと結んだ市民階級〔シトワイヤンとブルジョワ〕は、貴族的政府を更迭し、実質上、市民政府を打ち立てた。しかし、従来のフランス、ベルン、チューリヒの三国に加え、サルディニアの軍隊にも包囲されたジュネーヴの第1次革命は、ひとたまりもなく瓦解した」<sup>34)</sup>。

バッベに依れば、その結果、多数の「ナティブ派」が亡命を余儀なくされた<sup>35)</sup>。その10年後の1792年11月30日、サヴォアで作戦中であった将軍モンテスキュー伯率いるフランス軍がジュネーヴ市の入り口まで進攻してきたとき、ベルン・チューリッヒ同盟軍とモンテスキュー将軍との間で協定が結ばれ、両軍とも

ジュネーヴの国境から撤退するという事件があった。その直後、ナティブ派が蜂起して革命を成功させ、共和国の階層差別の廃止と身分的平等が実現された。さらに国民議会（Assemblée nationale）も設置され、憲法の起草が開始された<sup>36</sup>。1年あまり後の1794年2月5日にかつてのナティブ派も参加した市民総会で、人民主権の新憲法案が可決された。革命委員会は一旦は4人の理事会に席を譲ったものの、経済状態は回復せず、民衆は困窮から抜け出せなかった。革命委員会のプランは、個人財産を強制的に徴発して貧困者に再配分するというものだった。1794年7月19日夜、武装蜂起が勃発し、600人以上が投獄され、翌20日に革命裁判所が開かれ、508人に判決が下され、有力者が処刑されたという<sup>37</sup>。

ピエール・プレヴォがジュネーヴに帰還した1786年は、ちょうどジュネーヴの「第1次革命」と1792年の革命勃発までの間、いわばジュネーヴのアンシャン・レジーム期であった。プレヴォはその時期に、行政と司法の重要な役職に就いていた。200人委員会のメンバーのほかに、彼は、民事裁判所の判事（Juge au Tribunal Civil）の職務もまた務め、いくつかの事件では検事総長代理（qualité de Procureur-Général subrogé）として事件を取り仕切った<sup>38</sup>。当時彼は、社会秩序の諸問題に関する彼の意見を何度も雑誌等に公表した。1790年の4月に、彼は、「二つの革命の比較」（*Parallèle de deux révolutions*）をパリで発表した<sup>39</sup>。1792年10月13日には、「ジュネーヴ人が同胞に対する愛と彼らの行政官に対する畏敬を表現した軍事的セレモニーの関係」（*Relation de la cérémonie militaire par laquelle les Genevois ont témoigné leur amour pour la patrie, et leur respect pour leurs magistrats*）を發表し、数日後には「一ジュネーヴ人からモンテスキューの軍隊の一フランス人への手紙」（*Lettre d'un Genevois à un Français de l'armée de Montesquiou*）を、さらに1793年1月12日に、「ジュネーヴ、平等、独立、自由」（*Genève, égalité, indépendance, liberté*）が發表されている。これを読んでプレヴォに書き送ったとされるネッケルの讃辞は、プレヴォを多少過大評価しているとしても、これら多数の著作からは、祖国の危機打開のための彼の積極的な

発言や行動が想像できる<sup>40)</sup>。これには、1793年に同胞から求められて、国民議会の議員になったことも影響しているかもしれない。彼がその職務を引き受けたのは、非常に激しい議論がたたかわされる議会を和らげ、節度あるものにしたと願っていたことと、公教育に関する施設を支えたいと考えていたからだという。しかし彼の願いは叶わず、またしばしば非常にむなしい努力であることを痛感した彼は、4ヶ月後に辞表を出し、そのときからこの時期の公職とは無縁であり続けた<sup>41)</sup>。それにもかかわらずプレヴォは、1794年の革命によって7月19日に逮捕され、8月8日まで投獄された。彼がそれまで保ち続けていた政府高官との関係を利用して、「祖国[ジュネーヴ]に関心を寄せるように努め」て欲しいと彼がプロシャ国王に依頼した手紙が、彼を迫害する口実になったとされる<sup>42)</sup>。

1796年に始まるナポレオンのイタリア遠征は、ジュネーヴ共和国をも次第に危機に陥れていった。1798年4月、ジュネーヴはフランスに占領され併合されて、フランスの1カントンになった。その際プレヴォは、フランス政府との間でジュネーヴのフランスへの併合の条件を処理する委員会のメンバーになった<sup>43)</sup>。

ところで、ピエール・プレヴォより11歳年上の、シスモンディの父ジェデオン＝フランソワ・シモンド（Gédéon-François Simonde, 1740-1810）は、1778年に聖職を引退した後1782年に200人委員会のメンバーになっている。プレヴォがそのメンバーになる4年前である。したがってこの2人は、1786年以降のジュネーヴ共和国の激動の時代と同じ公職を務めていたことになる。1792年の「第1次革命」の勃発で翌年2月にイギリスに渡ったものの、シスモンディの母の病気のために約1年半後の1794年半ばにジュネーヴに帰国していたシスモンディー家を、次の革命が襲うことになる。シスモンディの父シモンドは、プレヴォと同様に、1794年7月の武装蜂起で投獄されたのである。まもなく釈放されたものの、多額の財産税を徴収されたシスモンディー家は、フランス国境に近いシャトレヌの土地と家を売却して、この年の秋、イタリアに向かった。

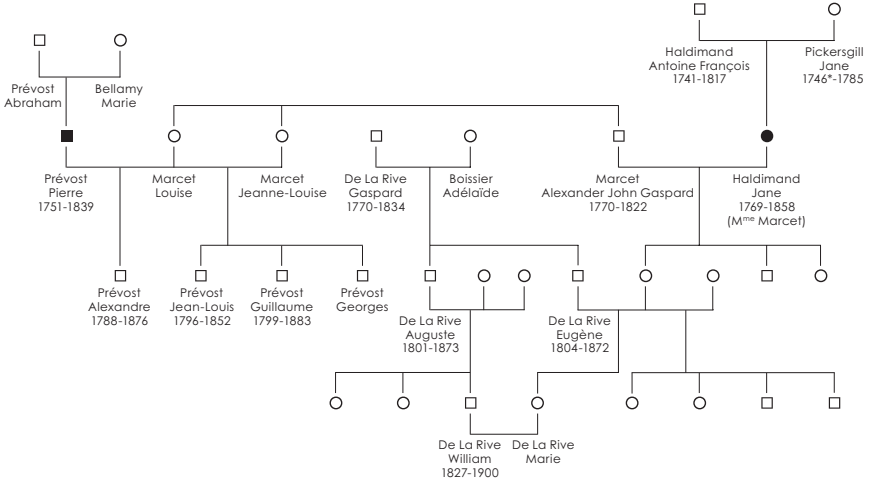
事実上の亡命である。10月からトスカナ地方で土地探しをしていたシスモンディはペッシャの近くの小作地を買い、11月に一家はこの地に移り住んだのであった<sup>44</sup>。シスモンディとプレヴォの接点は、父シモンドとプレヴォが務めた200人委員会という公職だけではない。シスモンディ自身、1809年にジュネーヴ・アカデミーの哲学教授に任命されている。アカデミズムの同僚としても、両者間に交流の機会があったのである。

行政関係の公務に多忙の時も、プレヴォは物理学だけではなく文学や哲学の研究や著作を続けていた。1792年に彼は、前任者の辞職により空席になった哲学講座の後任に志願し、公開選抜試験を受けた後、翌年3月にこのポストを得ることになった。その選考の際に与えられたテーマは、論理学として「三段論法について」、形而上学として「必然性と偶然性について」、物理学として「水力学」であった<sup>45</sup>。彼はこの時期、確率 (probabilités) に関する研究を G.-L. ル・サージュ (Le Sage) とともに続けた<sup>46</sup>。カンドルは、プレヴォが若年のおりに物理学を学び、後に友人になったル・サージュとの関係が、その後のプレヴォの物理学研究を方向付けたし、プレヴォの著作の多くに、ル・サージュがその知性を彼に及ぼした影響の目立った痕跡が見いだされると指摘している<sup>47</sup>。

### 3. ピエール・プレヴォとジェイン・マーセット婦人

ピエール・プレヴォは1788年、ルイズ＝マルゲリート・マーセット嬢 (Mademoiselle Louise-Marguerite Marcet) と結婚した。しかし彼女は、ひとりの息子アレクサンドル・プレヴォ (Alexandre Prévost, 1788-1876) を残して、翌年死亡した。1795年にピエール・プレヴォは、ジャンヌ＝ルイズ・マーセット嬢 (Mademoiselle Jeanne-Louise Marcet) と2度目の結婚をして、彼女との間に3人の息子、ジャン＝ルイ・プレヴォ (Jean-Louis Prévost, 1796-1852)、ギヨーム・プレヴォ (Guillaume Prévost, 1799-1883)、それにジョルジュ・プレ

la famille Prévost, la famille De La Rive, la famille Haldimand の家系図 \*\*\*



出所：Oliviere Perroux, *TRADITION, VOCATION, ET PROGRÈS: LES ÉLITES BOURGEOISES DE GENÈVE (1814-1914)*, 2006, pp.389-391, A.-P. de Candolle, *NOTICE SUR M. PIERRE PREVOST. Professeur émérite à L'Académie de Genève*, p.1, および出雲雅志「ジェイン・マーセットと経済学の大衆化」(飯田・出雲・柳田編著『マルサスと同時代人たち』(2006))、p.61\*\*から筆者作成。

- \* ) 生存年数と没年からの推測である。
- \*\* ) 本文中に記されていない欧文字記と生没年に関して、著者出雲氏からご教示いただいた。
- \*\*\* ) 各家族について、その子や兄弟等のすべてが網羅されているわけではない。

ヴォ (Georges Prévost) をもうけた。4 人の息子たちは健やかに育ち、ピエールは老後も彼ら息子たちと生活を楽しんだとシェルビュリエは述べている<sup>48)</sup>。ピエール・プレヴォの妻ルイズ＝マルグリート・マーセットは、『経済学問答』の著者であるマーセット婦人 (Jane Haldimand Marcet, 1769-1858) の夫アレクサンダー・ジョン・ガスパール・マーセット (Alexander John Gaspard Marcet, 1770-1822) と姉弟の関係にある。したがって、アレクサンダー・マーセットは、ピエール・プレヴォの義弟にあたる。一方、ジェイン (またはジャンヌ Jeanne) ・マーセット婦人は、ロンドンにいたスイス人商人アルディマン (Haldimand) の娘である。アレクサンダー・マーセットは、デュモン (Etienne

Dumont) やディヴェルノア (d'Ivernois) そして若きシスモンディと同様に、1794年のジュネーヴにおける革命騒動の間、イギリスに滞在していた。彼は指導的な化学者で、ガイ病院 (Guy's Hospital) の講師だった。ナポレオン後の時期に、彼は、ジュネーヴ・アカデミーの非常勤教授を務め、化学講座の開設の際にはオーギュスト・ドゥ・ラ・リーヴ (Auguste De La Rive) を援助したこともあった。1800年にイギリスに帰化したにもかかわらず、彼は一時、ジュネーヴの代議院に所属していた。1814年に彼は、ジュネーヴの再建に積極的に関与した。また彼は一時、ピクテ・ドゥ・ロシュモン (Pictet de Rochemont) 等とともにジュネーヴを代表してパリ講和会議に出席したり、デュモンやディヴェルノア、ジャスパール・ドゥ・ラ・リーヴ (Gaspard De La Rive)、それにシャルル・ルラン＝ピクテ (Ch. Lullin-Pictet) が果たしたのと同様に、ジュネーヴのためにイギリスにおいて彼らの影響力を拡大することに貢献したとされる<sup>49)</sup>。

ジェイン・マーセット婦人は、デュモンとは親密な関係にある友人であったし、両者にはさらにサー・サミュエル・ロミリー (Sir Samuel Romilly) が結びつき、ウイショー (J. Wishaw) とも親しかったという。そしてシスモンディは最も遅く、1815年から親交があったと指摘するパッペは、その年の8月21日付で母に送ったシスモンディの手紙を紹介している。

「夕食のために、ピクテ教授がマーセット夫妻とともに来ました。その方々は後に化学に関して執筆する著述家になり、また非常に卓越した女性であるアルディマン嬢と結婚した、プレヴォ教授の義兄弟です」<sup>50)</sup>。

フランスの1カントンになったジュネーヴにおいても、ピエール・プレヴォの学究生活は続いた。物理学に関する著作だけでなく、彼は1799年に「観念の形成に関わる記号の影響」 (*Influence des signes relativement à la formation des idées*)、1812年に「人間精神に関する考察」 (*Remarques sur l'âme humaine*) を発表している。1797年にはベルリン・アカデミーに「星の固有の動きに関する覚え書き」 (*Sur le mouvement propre des étoiles*) と「光の反射に関する光学的考察」

(*Quelques remarques d'optique relatives à la réflexibilité des rayons*) が提出されている。1805年には前年に死去したル・サージュの生涯と諸著作に関する注釈を出版するとともに、1818年には物理学に関するル・サージュの未刊の研究を出版した。1813年には「光の単位と伝播に関する考察」(*Remarques sur la mesure et la propagation de la lumière*) が『ビブリオテーク・ブリタニク』(*Bibliothèque Britannique*) 誌に掲載されている<sup>51)</sup>。さらにシェルビュリエによれば、1804年から1813年までの間に『文芸アルシーヴ』(*Archives littéraires*) 誌にさまざまなテーマで23編の論文を、また『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に多数の英語文献抜粋を発表している<sup>52)</sup>。

プレヴォは、アダム・スミス (Adam Smith)、ブレール (Blair)、マルサス (Sir Thomas Robert Malthus)、ベル (Bell)、マーセット婦人、それにデュガルト・スチュアート (Dugald Stewart) などの翻訳をしている。パッペは、「プレヴォはジュネーヴにおける最初の国民経済学の教師であった」<sup>53)</sup> と指摘している。ブレールの修辞学 (*Cours de rhétorique*) の翻訳は1807年2月に開始されて10月に完成、D. ステュアートの *Elements of the Philosophy of the Human Mind* の第1巻および第2巻の翻訳は1807年11月から翌年2月までのわずか3ヶ月で完成してその年に出版された。プレヴォはD. ステュアートに、1792年にたった1回しか会っていないにもかかわらず、その後の活発な手紙のやりとりによって両者の間は「本物の友情で結ばれていた」とカンドルは指摘している。マルサスの翻訳は1808年3月から9月までの6ヶ月間で完成された<sup>54)</sup>。

プレヴォによるマーセット婦人の翻訳は1817年に出版された。しかしすでに1816年の『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』(*Bibliothèque Universelle*) 第2巻に、プレヴォによる概要と著作からの抜粋が注釈付きで出版されていた。パッペの研究に依れば、マーセット婦人は道徳を重視し、かつ、富の追求と一般的福祉とのあいだに満足すべき均衡を見いだすことを信じていた。パッペはそのことを、マーセット婦人『経済学問答』のなかの以下の箇所を引用して示して

いる<sup>55)</sup>。

「キャロライン:裕福であれ、大いに裕福であれ、他の誰よりも裕福であれ、これが経済学の究極の目的であるように思われる。他方、道徳と宗教はわれわれに、利益への愛をもって、あらゆる罪の源である富の欠乏を緩和することがわれわれの義務である、ということを見せている。…しかし、もし富が諸個人を幸福にしないのならば、富はどうして国民を幸福にするのだろうか？ 貧困ではあるが徳の高い人々は、豊かではあるが悪徳な人よりも確実により幸せである。

マダム B:…われわれの非難は根拠がない。真の経済学諸原理は、…すべて国民の幸福の促進を期しているものであり、最も純粋な道徳の戒律に一致している。それらは、国民の繁栄を増大させる真の手段は平和であり、安全であり、正義であること、一方や他方（国民や個人）を犠牲にして豊かになるのではなく、両者が自由な商業体制によってたがいに助け合うということを示すことによって、満たされない渴望を緩和する傾向がある。経済学は、とくに、ねたみ (envie)、嫉妬、悪意の感情の敵である。」<sup>56)</sup>

これに対してパッペは、「プレヴォは、そのような『経済学と道徳との間の貴重な接近』に、まだ究明されていない深さが隠れていると見る」と指摘して、プレヴォの以下の主張を引用している。

「他の諸科学で何回も成功した方法、極端な仮定を立てるという方法を、ここで適用することはできないのだろうか？ もし労働がすべての分野で単純化の最後の用語に用いられたらどうなるのだろうか？ すべてが非常に短い時間で容易に生産され、需要は全体として増加し、われわれが注解を加えるテキストの論理にしたがって、生産は需要に比例するだろう。そして、労働の容易さにもかかわらず、より多くの労働者が活動することになるだろう。その結果は、労働者の食糧、衣服、住まいが改善するということになるのだろうか？ 一多分。一何の疑いもなく、富者はあらゆるも



ので豊かになる。この豊かさのなかで一部の貧者は、彼らを維持するよりはるかに多くのものを作り出すということはほとんど確実である。… [4 行省略] …さまざまな形のもとで思い描かれるこの観察は、富の論理を構築したとしても幸福の論理はつくられない、ということ強く示している」<sup>57)</sup>。

パッペは、マーセット婦人の楽観的な見解に批判的なプレヴォに注目している。富の増加が人々の幸福に無媒介的につながるわけではないというプレヴォの見解に、シスモンディとの共通性がかいま見えるからである。パッペは次のように述べている。

「労働の合理化、それは分業を通じてであり、機械化を通じてであり、そしてその結果は、セー法則への懐疑。われわれはここでシスモンディ固有の領域にいる。これらの問題は、すでに1816年にプレヴォの心を捉えていた。シスモンディは、イングランドでのみ起こったのではなくジュネーヴの哲学者たちをも活発に取り組みさせた論争に、関わっていたのである」<sup>58)</sup>。

## おわりに

プレヴォは、1817年にロンドンに住む長男アレクサンドル・プレヴォの強い勧めで、4ヶ月間のイギリス旅行をした。その帰国後も彼は精力的に研究を続けており、何点かの重要な著作、とりわけ1818年の2冊の『機械物理学概論』(*Traité de physique mécanique*)と1832年の『輻射熱の原理』(*Principes de la chaleur rayonnante*)、それに『オディエ博士とベネディクト・プレヴォに関する書誌』(*Notices biographiques sur le docteur Odier et sur Bénédicte Prévost*)を刊行しているし、ジュネーヴ物理学・自然史協会(Société de physique et d'histoire naturelle de Genève)に、あるいは『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌や『化学物理学年報』誌(*Annales de Chimie et de Physique*)等に多数の論文を発

表している<sup>59)</sup>。オディエ博士はプレヴォの友人であり、ベネディクト・プレヴォはピエール・プレヴォの父親である。

1823年、プレヴォ 72歳の時に、彼は30年にわたって務めた教授職を辞任した。1838年11月26日、彼は寝室で転倒し、大腿骨頸部を骨折するけがを負った。そのためにベッドで寝たきりの状態を余儀なくされ、その後肺炎を起こして翌1839年4月8日に他界した。享年88歳1ヶ月であった。

カンドルもシェルビュリエも、ピエール・プレヴォの追悼文の中で、プレヴォの不断の努力、温厚な性格、そして他人への愛を称賛している。シェルビュリエはそのなかでひとつのエピソードを紹介している。「私は一度、彼 [ピエール・プレヴォ] がはじめて感情の動揺をさらすのを見た記憶がある。それは激しい動揺だった。…それは哲学の授業中だった。教授は、われわれの学友のひとりの不注意に我慢できなくなって、突然、怒った様子で彼を怒鳴りつけ、彼をわんぱく小僧扱ひした。それから彼 [プレヴォ教授] はすぐに気を落ち着けて、次のように言った。『私は間違っている。あなたは若くて強く、立派な学生だ。あなた自身の利益とともに私に対しても配慮することに、将来、もっと熱心になる必要があることぐらい、あなたは完全に理解していると、私は確信している』」。これに続けてシェルビュリエは、プレヴォがこのように怒りをあらわにしたのはこのとき1回だけで、普段は決して怒ったりしなかった、ただ、「彼の変化する表情だけが、そのようなときに彼の内面にある葛藤を表現していた」と述べている<sup>60)</sup>。

シスモンディより20歳ほど年上であるとはいえ、ピエール・プレヴォは、革命による旧支配勢力の追放と身分階層性の撤廃、フランスへの併合と独立、スイス連邦への加盟等ジュネーヴの激動の時代をシスモンディに近いところで生き抜いた。時には公職に就きながらも学問の進歩と教育への情熱を燃やし続けたプレヴォから、父親と同じ官職に務める教師として、あるいは後に同僚として、多くのことをシスモンディは学んだに違いない。まさにパッペが指摘する

ように、プレヴォとシスモンディがいる土俵は、客観的な状況から見て共通である面が多いと言えるだろう。

(注)

- 1) 拙著『シスモンディ経済学研究』三嶺書房、1997年。
- 2) いずれも拙稿「シスモンディとリカードウの一接点」(熊本県立大学総合管理学会編『新千年紀のパラダイム —アドミニストレーション— (熊本県立大学総合管理学会創立10周年記念論文集)』九州大学出版会、2004年)、「シスモンディの経済思想とその由来」(飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編著『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社、2006年)、「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」(『アドミニストレーション』第15巻3・4合併号、2009年3月)等を参照。
- 3) A.-P. de Candolle, *NOTICE SUR M. PIERRE PREVOST. Professeur émérite à L'Académie de Genève.* (Tiré de la Bibliothèque universelle de Genève.), Avril 1839. A. Cherbuliez, *DISCOURS SUR LA VIE ET LES TRAVAUX DE feu Pierre Prevost, ANCIEN PROFESSEUR DE PHILOSOPHIE À L'ACADÉMIE DE GENÈVE. Prononcé à Genève, à la Cérémonie des Promotions, le 12 Août 1839.*
- 4) Hellmut Otto Pappe, *Sismondis Weggenossen*, 1963.
- 5) 父の職業の順序はカンドルとシェルビュリエで異なった解説になっている。
- 6) Candolle, *op. cit.*, p.1.
- 7) Cherbuliez, *op. cit.*, p.8.
- 8) *ibid.*
- 9) *ibid.*, p.10.
- 10) *ibid.*
- 11) シェルビュリエは以下のように述べている。「彼が楽しんでた自由と、自由が彼に突然提供した光り輝く見通しを、彼はどれほど味わったことか！ 十分な力強さと健康な若者、彼をいとおしむ両親と友人たちに取り囲まれ、多くの異なる知識を持ち、並はずれた活動的で洞察力の鋭い精神 (esprit) と、あらゆる感動に感じやすい精神 (âme) に恵まれて、彼は、彼自身の内でも彼の外でも、知的な能力を持っているという感情を乱すとか、彼が設けた目的を達成するためにそれを使うことを妨げるなど全く見られなかった」。 (Cherbuliez, *op. cit.*, pp.10-11.)

- 12) Candolle, *op. cit.*, p.2.
- 13) Cherbuliez, *op. cit.*, p.15.
- 14) キャンドルは、「彼（プレヴォ）はルソーとの会話を思い出すことを好んだ。そしてこの交際の結果、後（1780年）に彼は、この著名な著作家の著作集の死後の版に…断章を、そして1804年に *Archives Littéraires* 誌に J.-J. ルソーに関する手紙を寄せた」と指摘している（Candolle, *op. cit.*, p.2.）。しかし筆者はまだその所在を確認していない。
- 15) さらにプレヴォは、エウリピデスの翻訳を1782年にも出版し、また1805年には *Archives Littéraires* 誌にエウリピデス哲学に関する3編の断章を発表しているという。（Candolle, *ibid.* p.2.）
- 16) Cherbuliez, *op. cit.*, p.16.
- 17) 青年貴族アカデミーにおける哲学教授ポストの前任者はスイツェル（Suizer）という人物だったが、死去によってそのポストは空席になっていた。その後継者として当初マイスター（Meister）という人物が提案されたが、マイスターはこれを断り、彼の友人で、当時ベルリンではその名がすでに十分知られていたプレヴォを推薦したとシェルビュリエは述べている。さらに、シェルビュリエは「この時期、大フレデリックがまだ健在で、彼のおかげで化学と文芸の発展がベルリンにフランス色をもたらした。アカデミーではフランス語で論文が読まれていたし、多くの公的なコースがこの言語で提供された」と説明している。（Cherbuliez, *ibid.*）
- 18) Candolle, *op. cit.*, p.2.
- 19) *ibid.*, および Cherbuliez, *ibid.*, p.19.
- 20) Cherbuliez, *ibid.*, p.17.
- 21) *ibid.*
- 22) *ibid.* なおシェルビュリエは後者の論文に関連して、「ル・サージュ（Le Sage）の考え方がプレヴォの精神に及ぼした影響が見取れる」と指摘している。
- 23) シェルビュリエはこれを次のように述べて高く評価している。「そこで彼は、すでに経済学研究のための適性をすべて持っていることを証明していた。彼が、彼の思考に新しい領域を切り開いた『諸国民の富』に関するアダム・スミスの著作を知ったのは、1、2年以上後であるにすぎない」。（Cherbuliez, *ibid.*, p.19.）
- 24) シェルビュリエに依れば、プレヴォは上記の他に、「旧政府の経済に関する小論」（*Mémoire sur l'économie des anciens gouvernements*）や「イギリスの財政事情」（*État des finances de l'Angleterre*）を発表している。（Cherbuliez, *ibid.*）
- 25) キャンドルもシェルビュリエも、プロシヤ国王はじめベルリンでの知己たちはプレヴォの帰国を非常に残念がったと記している（Candolle, *op. cit.*, p.3. Cherbuliez, *ibid.*, pp.20-21.）。とくにプロシヤ国王フレデリックは、プレヴォが辞職を依頼した書状に

に対する1784年7月26日付けポツダムからの返書で、有能な資質を持つプレヴォには引き続き自分のもとで仕事をしてもらいたいが、プレヴォが退職に固執するのなら残念ながら同意する、と書き送っている。(Cherbuliez, *ibid.*)

26) プレヴォがなぜこの時期にギリシャ演劇の研究のためにパリに行かなければならなかったのかについては、キャンドルやシェルビュリエの記述では不明である。おそらくジュネーヴ・アカデミーの教授職が文芸を専門にしていたこと、プレヴォ自身がさきにエウリピデスの翻訳で成功を収めていたのであるが、さらにその翻訳を推し進める意図が彼にあったということが想像できる。シェルビュリエは、パリ滞在中にプレヴォはエウリピデスに憧憬が深かったシャリエール婦人 (M<sup>me</sup> de Charrière) と大いに親交を結んだと述べている。しかしそれだけではなく、プレヴォにとって文芸は必ずしも自分の能力のすべてを発揮できる分野ではなかったと、シェルビュリエは指摘する。(Cherbuliez, *ibid.*, p.22.)

27) Candolle, *op. cit.*, pp.3-4, 6 および Cherbuliez, *op. cit.*, p.26.

28) M. DIDEROT et M. D'ALEMBERT, *ENCYCLOPÉDIE, ou DICTIONNAIRE RAISONNÉ DES SCIENCES, DES ARTS ET DES MÉTIERS*, tome septieme, 1757. p.575.

29) *ibid.*, p.576.

30) 河合清隆『ルソーとジュネーヴ共和国』（名古屋大学出版会、2007年）。p.23. なお、河合氏の本著は、16世紀前半の宗教改革期＝ジュネーヴ共和国成立期から18世紀末までのジュネーヴの歴史をジャン＝ジャック・ルソーとその著作を通じて詳細に跡づけた好著で参考になる。

31) *ibid.*, p.25.

32) *ibid.*

33) *ibid.*, pp.25-26.

34) *ibid.*, p.241.

35) Jean-R. de Salis, *SISMONDI 1773-1842, LA VIE ET L'OEUVRE D'UN COSMOPOLITE PHILOSOPHE*, 1932. (SLATKINE REPRINTS, 1973). pp.21-23.

36) *ibid.* および河合清隆, *op. cit.*, p.242.

37) *ibid.*, pp.26-28.

38) Cherbuliez, *op. cit.*, p.24.

39) シェルビュリエに依れば、プレヴォはこの一論の中でこう述べているという。「革命は和らげることができるし、災いから善を引き出すことによって避けることができる行き過ぎを示すことは、なにがしか有益であると当時考えた」。Cherbuliez, *ibid.* しかし、注36) を付した本文中のプレヴォの著作やネッケルの手紙も含めて、それらの

所在と内容について筆者は未確認である。

- 40) これに対して「ネッケルはこれらのパンフレットのひとつのテーマに関してプレヴォに次のように書き送った。「あなたは、けんかの場面のまっただ中にいる仲裁者たちの中の最良の人、悪い結末となった困難のまっただ中にいる交渉委員たちの中の最良の人に分類される。あなたはおおいなる聡明さと、的確さと、方法等々をもって困難なテーマを論じた」。(Cherbuliez, *ibid.*, pp.24-25.)
- 41) Candolle, *op. cit.*, p.4.
- 42) Cherbuliez, *op. cit.*, p.25.
- 43) Candolle, *op. cit.*, p.4.
- 44) DE SALIS, *op. cit.*, pp.25-28 参照。
- 45) Candolle, *op. cit.*, p.4 および Cherbuliez, *op. cit.*, p.29.
- 46) シェルビュリエは、「彼は新しい職務でこの理論 [確率論] の諸要素を示すように勧められ、そのために書いたノートをラテン語で出版」とともに、ベルリン・アカデミーに提出した3つの論文のなかでこのテーマを3つの部分で深く掘り下げている、と指摘している。3つの部分とは、第1に、「諸結果によって諸原因の確率を測定する技術について」、第2に、「諸原因の確率を測定する原理の有用性と範囲について」、第3に、「証拠の価値への確率計算の応用について」である。(Cherbuliez, *op. cit.*, p.30.)
- 47) Candolle, *op. cit.*, p.6.
- 48) Cherbuliez, *op. cit.*, p.48.
- 49) Hellmut Otto Pappe, *Sismondis Weggenossen*, 1963. p.73. パッペはアルディマン (Haldimand) を Haldimann (oder Hallimand) と記述している。この両者は英・仏語の相違と思われるが、Haldimandとは綴っていない。一方、Olivier Perroux, *TRADITION, VOCATION ET PROGRÈS, LES ÉLITES BOURGEOISES DE GENÈVE (1814-1914)*, Slatkine, 2006 では Haldimand とだけ記されている。ここでは最新とも言える後者で表記する。
- 50) Pappe, *op. cit.*, p.75.
- 51) Candolle, *op. cit.*, p.8 および Cherbuliez, *op. cit.*, p.33.
- 52) Cherbuliez, *ibid.*, p.39.
- 53) Pappe, *op. cit.*, p.71.
- 54) Candolle, *op. cit.*, p.8 および Cherbuliez, *ibid.*, p.50.
- 55) Pappe, *op. cit.*, p.77.
- 56) Jane, Marcet, *CONVERSATIONS ON POLITICAL ECONOMY; IN WHICH THE ELEMENTS OF THAT SCIENCE ARE FAMILIARLY EXPLAINED*, 1817, pp.19-20. (PHILADELPHIA edition)

- 57) *ibid.*, p.78. パツペはこれを、*Bibliothèque Universelle*, Nr2 (1816), p.362 からの引用と注記している。
- 58) *ibid.*
- 59) Candolle, *op. cit.*, p.9 および Cherbuliez, *op. cit.*, p.54.
- 60) Cherbuliez, *ibid.*, pp.60-61.

### 参考文献

- Candolle, A.-P. de, *NOTICE SUR M. PIERRE PREVOST. Professeur émérite à L'Académie de Genève.* (Tiré de la Bibliothèque universelle de Genève.), Avril 1839.
- Cherbuliez, A, *DISCOURS SUR LA VIE ET LES TRAVAUX DE feu Pierre Prevost, ANCIEN PROFESSEUR DE PHILOSOPHIE À L'ACADÉMIE DE GENÈVE. Prononcé à Genève, à la Cérémonie des Promotions, le 12 Août 1839.*
- Diderot, M., et D'Alembert, M., *ENCYCLOPÉDIE, ou DICTIONNAIRE RAISONNÉ DES SCIENCES, DES ARTS ET DES MÉTIERS*, tome septieme, 1757.
- Marcet, Jane, *CONVERSATIONS ON POLITICAL ECONOMY; IN WHICH THE ELEMENTS OF THAT SCIENCE ARE FAMILIARLY EXPLAINED*, 1817. (PHILADELPHIA edition)
- Pappe, Hellmut Otto, *Sismondis Weggenossen*, 1963.
- Perroux, Olivier, *TRADITION, VOCATION ET PROGRÈS, LES ÉLITES BOURGEOISES DE- GENÈVE (1814-1914)*, Slatkine, 2006.
- Salis, Jean-R. de, *SISMONDI 1773-1842, LA VIE ET L'OEUVRE D'UN COSMOPOLITE PHILOSOPHE*, 1932. (SLATKINE REPRINTS, 1973).
- 出雲雅志「ジェイン・マーセットと経済学の大衆化」（飯田・出雲・柳田編著『マルサスと同時代人たち』（2006年））
- 河合清隆『ルソーとジュネーヴ共和国』（名古屋大学出版会、2007年）
- 中宮光隆『シスモンディ経済学研究』（三嶺書房、1997年）
- 「シスモンディとリカードウの一接点」（熊本県立大学総合管理学会編『新千年紀のパラダイム —アドミニストレーション—（熊本県立大学総合管理学部創立10周年記念論文集）九州大学出版会、2004年）
- 「シスモンディの経済思想とその由来」（飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編著『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社、2006年）

—「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」(『アドミニストレーション』第15巻3・4合併号、2009年3月)

(本稿は、平成21年度科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号20530170)による研究成果の一部である。)